

中根辰榮

雨景色の迫るやふな匂ひがする。道理で客足は伸びぬはずだ。

「御父さん、醤油が切れさふですが」

「…店仕舞も有りかな」

「え、何を言ひ出すのですか」

「何だ、俺何か言つたかひ」

「さふ言ふ事は私に相談をしてから言つてくださひ。か

ふも唐突に言はれては」

言葉の齟齬と云ふものは意外に纏れ続けてしまふらしひ。

「だから、今店仕舞するか」と

「いや、其れは今日の空が雨模様かと思つて」

「嗚呼、今日だけの事ですか」

「抑々店を辞められる様な余裕なんて無ひよ」

嫌になつてしまふ。子供の頃から心を本当の口先に出してしまふ癖が抜けずに此処迄来てしまつた。かふいふ悪い癖と云ふ物は質が悪くて抑へる程に大きく出てしまふ。呼び鈴が鳴る。

親父の前だらふと躊躇無く出せてしまふから、坊主頭の頃からずつとぶたれる、口が出る、追加注文を預かるといふのを繰返した。

「御父さん、江口さんです」

まあ但し、口に出してしまふことが総じて悪ひ事ばかりだつたわけぢやなひ。何処かから聞ひた話だが、人といふものは胸襟を開いた関係を築くのが大の苦手といふ。そこで、一方が威勢よく胸元をガバリと開く。すると途端に相手も見様見真似ではだけさせる。かふいふときに癖は無意識に手助けしてくれる。

「御父さん」

何時ぞやか忘れたが、涼子の見合ひの際、相手方の袴が少し解れてしまつてゐたのを、

『すみませんが、襟元が少々解れてゐますよ』と教えてあげたら感謝されて

「御父さん！」

人間、想起とか何やらに耽ると外界を遮断してしまひがちである。

「なんやなんや。誰か来たか」

「江口さんです、四丁目の」

「あゝ、いやいや済まなひね」

とつと暖簾をまだ掛けていなひ入口に向かふ。

「いやあ、すみません。つひつひ物思ひに耽つちまつて」

「こつちこそ開店前に」

「気にせんでください。御注文ですか」

「此の後私の家に親戚が来るもので。拉麵を五で」

「わかりやした。何時頃に」

「十一時頃に」

「承りました。拉麵五つを十一時頃」

「それぢやあ御願ひしますわ」

一礼し、小路を小走りで駆けてゐつた。

「まふ御父さん、物思ひも程々にしてください」

「何遍も呼ばせてすまんかつたの。十一時に江口さんの處に拉麵五つ」

「分かりました」

開店前、と言つても数分の後には暖簾を掲げねばならなひ。此の数十年、災害だの冠婚葬祭とかが無ひ限り毎日繰返してきた此の動作。

あゝ、嫌気がさしてくる。

暖簾を出したはいいが、大粒の水玉達が其れを湿らせんと空から突撃してくる。

ガラガラ。

「いらつしやし」

入口脇の座卓にどんと構へて座る客。

「御注文は」

「拉麵、海苔抜ひてくれ」

「分かりました。拉麵茹でろ！」

厨房の良一が動く。

「これ、お冷です」

コトリ。

沸騰した湯の揺らぐ音。厨房はまふ彼奴に大半を任せてゐる。前の年から右脚に病が入つて立つて作業してゐるのが苦になつた事もあつたし、抑々厨房其れ自体も狭いので分量とかを掴んだ一人が居れば何ら問題無ひと思つてゐたことも有る。最近はずつかり厨房の煤けた色に良一の姿がよく馴染んできた。

「御父さん」

「お」

湯気立つ拉麵が差し出される。黒ひ板は無ひ。

「へゑ、お待たせ致しました」

パキリと割箸を割つて啜り始めた。

一旦平穩になる食事中の此の間。環境に有る幾多の音が聞こえる此の間。時々啜る音が聞こえるがそれもまた環境の一つであらふ。

「厨房の」

私に言つてゐるらしひ。

「え、へえ何でせふ」

「若旦那は腕が良いな」

「あゝ、どうも。いやあ最近では彼奴の腕も立ちまして。

私も歳が来てゐるんでそろそろ店番を換わらふかと」

「おやぢさんはまふ作らなひんで」

「いや作れなひ、と云ふことぢや無ひんですがね」

「何か御病気で」

「ええまあ。りうまち(注一)、だかそんな病気で」

「そいつは治るのかひ」

「いいえ。医者が謂ふには痛みの原因である炎症を抑えるしかないさふで。さりしん(注二)言ふ薬で痛みを抑へてます」

「それはまあ。御辛いでせふな」

「いやだふも……」

「馳走様。此処に丁度」

「あ、ま毎度。……丁度ですな」

「ありがとごさいやしたあ」

ピシと戸が閉まる。

……憐憫の情は幾度となく掛けられた。

「いやあ大変だね」「若旦那、頑張つて支えてやれや」

「良ひ若旦那なあ」「あんたもやふ頑張つてるよ」

別にかふいづの聞き飽きたわけではなひのだが、言葉にし難ひ何かを、ずうつと持ち続けている。得も言はれぬ「何」を。

あれ以降、店に来る客は居なかつた。四丁目の江口家

への出前は今正に出来上がる處だ。湯気立つ腕を見つめる。具材が未だ途中だ。彼奴が具材を取り上げてゐる姿が湯気の所為で幻じみて見へる。能登だか魚津の屋敷楼(注三)が見へる。海其の物はじつとしてゐるのに、物が逆様になる。何故だか知らぬが、何時ぞやに見た其の景色と共に、潮風が鼻を突ひた。ざゝあ、といふ荒波が聞こへる。何処かへ、何処かへ行く。波風に乗つて、ずうつと、何処かへ。

「御父さん！」

……参つた。また外界との交流を断絶してゐたらしひ。

「江口さんとこへの拉麵です。岡持にまふ入れましたか

らね」

「あゝ、助かるよ」

背中では彼奴のため息を聞きながら

「そんなや」

とだけ言つて入口から歩き出した。雨が迫つてゐる。

一度大通りに出ると、自分の住む世界に直結するとは到底思えない「世界」が見へる。数十年前、私が尋常小学校(注四)に通つてゐた時代は消へ、「今の姿」しか無ひ。少しはこいらに住む奴等を考へなひのかと思ふが、さふした処で商ひ人の小言如きである。少しばかりであれ昔の姿を残さふものなら、やれ「古ひ古ひ」やれ「早ふ刷新しなさつたら」とかはれ、嗤われてしまふ。

時代錯誤の野郎は、直ぐさま嫌はれる。

「江口さん、幸樂です。拉麵を」

勝手口があく。

「あゝ、これはだふも」

「五十五銭です」(注五)

「はいよ」

がま口から銭貨を出して手渡してきた。

「丁度ね」

「お。いやあ親父さんほんと良ひ所来てくれたわ」

「何や」

「いやな、さつきから俺達聞かれてならねこと話し合つてるんだけどよ」

「何をさ」

「婦人運動賛助だよ。新婦人協会(注六)とかの」

「へえ」

「そんで今の治安警察法だと、それやると下手するとお縄でな(注七)。時を外を見てるんだが嗅ぎ回る奴が居るらしひ。其処にあんたが来てくれた。外から人呼んで出前を取つてあれば少しは怪訝な表情を和らげられるだろ、てね」

「ううん、やふ分らんな」

「まあ兎も角、美味しく頂きますわ」

「だふもね。食ひ終わつたら明日には腕を取りに伺いますから」

「へえよ。ぢやあ」

「毎度」

難しひ。江口さんの處に行く度にさふいふ話を聞くがちつとも分からなひ。新聞は良く読んでゐるつもりだがそれでも判らなひ。

分からなひのは、矢張如何なものか。

努力しても、矢張分からなひのである。

結局、此の日は海苔抜き拉麵と筒持に入れていつた拉麵五つが出ただけで終つた。

「片付け終はりやした」

「お」

椅子上げと卓拭きは私がやつた。此の分担もいつもと同じである。

「それぢや、御先に」

「また明日も宜しく」

「勿論です」

戸が開閉して人一人の空白が空く。

紅い斜陽が西窓から差し込む。何か、急かされるやふな気がする。「すべき」を「せよ」にすべき何かがあるやふ

に思ふ。然しそれは形而上に留まる。出なひ。出なひ。

かふやつて、日日が過ぎてゐる。

また明日、東窓に白い陽光が射す。其の時には思ひ出せてゐると思ふ。…それを堂堂巡りしてゐるのに、また私は其れを待つのか。分つてゐる。だが、足に、手に、胴に、指先に爪先に、そして脳内に。絡みつく何か、動く事を許してはくれなひ。

憐憫を持てるやふな余裕のある健康体に、

知識有る活動的な人間に、

私は置ひて行かれる。

多分それが、延延と続ひていくのだらふ。

独り、客席の中に佇み、帰り支度に入る。

注一及び注二

関節リウマチ(Rheumatoid Arthritis)の正式な呼称である「関節リウマチ」が制定されたのは二〇〇二年の第四十六回日本リウマチ学会総会でありそれ以前は「慢性リウマチ関節症」と呼ばれていた。勘違いされやすいが、関節リウマチは単に関節部を侵すだけでなく血管や臓器に侵攻することもある(このような病気を総称して膠原病という)。この治療法は古代から多岐にわたつて存在していた。古代から中世ではヤナギの葉・樹皮から取れるサリシンを鎮痛剤(サリシンの主成分であるサリチル酸 $C_6H_4(OH)COOH$ は現在も抗炎症薬として利用される)として利用する方法がとられた。十九世紀から二十世紀には膠原病の概念や各種病気の研究が行われ、現在も抗炎症薬として有名なアスピリン(アセチルサリチル酸)が開発される。

注三

蜃気楼とは、光の光線が密度の高い冷気へと引き寄せられやすい性質が原因となり、気象条件などで高度差に沿つて極端に温度差が生じる場合において通常直進する可視光線が冷えた高密度の空気の方へ屈折して本来見えないはずの物体が浮いて見えたり、実際に見える物体が一部消えて見えたりする事(前者は上方蜃気楼、後者は下方蜃気楼という)。日本において、蜃気楼は魚津などの日本海沿岸地域のみならず、琵琶湖やオホーツク海地域でも見られる。

注四

明治一九年の第一次小学校令によつて設置され、昭和十六年に国民学校初等科に改称されるまで使わ

れた初等教育機関の呼称。修業期間は四年で、義務教育とされた。

注五

参考になるが、大正九年頃のそば・うどんの平均価格は八〜十銭(現在の三二〇〜四〇〇円程度)。

注六

一九一九〜一九二四。女性婦人の参政権などの政治的及び社会的権利の獲得を目的とし、平塚らいてう、市川房枝らによって結成された日本初の婦人団体。治安警察法第五条二項における「女性の集会の自由の禁止」を改正させるなどの活躍を見せるも、平塚・市川ら主要メンバーが脱退したことで解散。

注七

この状況では秘密結社による活動が推定されるため、警察は治安警察法第十四条「秘密結社の禁止」に反するとして、摘発も可能となる。